

## あの頃の地理学教室

小島靖司

地理学教室創設50周年、本当におめでとうございます。私などまだまだ若輩者と思っておりましたが、大学を卒業して早くも15年という月日が経ってしまいました。在学中はもとより、卒業後、府立高校で教鞭をとるようになってからも、地理学教室の多くの先生方、並びに先輩方より御指導、御鞭撻を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、正直申し上げて、私には50周年記念誌にふさわしい原稿を書き上げる自信はとてありません。今から思えば、在学中の私は学問を志していたとはとても言えない、ぐうたらな学生生活を過ごしておりました。決して勉強が嫌いというわけではなかったのですが、アルバイトやサークル活動に明け暮れる毎日で、良い意味でも悪い意味でも学生生活をエンジョイしておりました。「もっと真面目に勉強していれば良かったのになあ」と、この歳になって反省することしきりですが、その当時は危機感を全くもっていませんでした。従って、こんな私が地理学教室の思い出を書くわけですから、どうしても当時のエピソードに対する雑感を書き綴ったものになることをご容赦下さい。

私は最初から大学では地理学を専攻しようと考えておりました。もともと鉄道少年で、地図や旅行が好きだった上、高津高校で武岡先生、山元先生、嶋中先生（いずれも地理学教室の偉大な先輩方でした）という素晴らしい先生方に出会い、進学するなら大阪市立大学文学部と心に決めておりました。学力不足で、1回は門前払いの憂き目に遭いましたが、1980年4月には晴れて市大生になることができました。

その頃の地理学教室は、文学部棟の1階に研究室や書庫があり、スタッフは小林教授、春日教授、服部教授、中村教授、平野助教授、山野助教授という先生方でした。現在もそうだと思いますが、文学部の学生は学科専攻を1回生の後期に決定します。我々の学年で地理学を専攻したのは当初6名で



した。同期の小向君、壁谷（現浅野）君と、専攻が確定した頃に初めて研究室を訪れました。まだ、地理学教室のことをよく知らない我々3人を院生や学部生の先輩方は実に暖かく迎え入れて下さいました。その時のアットホームな雰囲気は自分にはすごく合っているように感じました。このほか同期の地理学専攻者は中垣君、豊田君、高橋君で、後に中濱君が専攻の変更で加わりました。

地理学の専門科目を受講するようになったのは2回生以降でした。多くの講義を受講しましたが、印象に残っているのは、小林先生が担当された地誌学、春日先生が担当された地理学概論や地理学演習Ⅱ、服部先生が担当された地図学、山野先生が担当された地理学実習Ⅱなどです。

小林先生の地誌学は楽しいエピソードが毎回聞ける講義だったのですが、後半はドイツ各地の特色を体験談を交えて講義されたので、我々学生はこの講義を密かに「小林先生ドイツ漫遊記」と名付けていました。小林先生ごめんなさい！

春日先生の地理学概論は授業のノートをとるのがシビアでした。おまけに土曜日に講義があり、出席すること自体、我々にはかなりの試験でした。しかし1年間の講義が終わって出来上がったノート（一部は友人から借りたコピーでしたが）は、近代地理学創世期の頃から現代地理学に至るまでの地理学の流れ、そして著名な地理学者の思想やその功績がすべて網羅された素晴らしい専門書に変身していたのです。これは今でも大切に保管しています。でも、試験もぐうたらな学生にとってはかなりハードでしたね。一方、3回生の時に受講した地理学演習Ⅱでは外国語の文献を教材としていたのですが、翻訳・解説担当と質問担当が順番で回ってくるので、そのどちらかに当たっていれば緊張の連続、そうでなければ気楽に受講という、学生にとって天国と地獄が交互にやってくるような講義でした。

服部先生は温厚な先生で、いつも一服しながら笑顔で講義を進められました。私が受講した地図学では、毎回講義の最初にちょっとした雑談があり、その話を聞くことも楽しみの一つでした。

2回生の時に受講した山野先生の地理学実習Ⅱは野外調査がメインで、この年は奈良県都祁村で現地調査を行いました。私は大和茶の生産について調査したのですが、生産農家の聞き取りでは、良い話し相手が来たとはばかり、2時間も3時間も話を続ける老人にちょっと閉口しました。

スペースがあまりないのが残念ですが、中村先生や平野先生の講義、また非常勤講師の須原先生の講義なども印象に残っています。

さて、当時の研究室には院生が主催する自主的な研究会がいくつかありました。上原さんが主催されていたコペルニクス研究会（正式名は違うかも知れませんが、すみません）、大場さんが主催されていたTUG（都市地理学研究会）などです。当時の私は都市地理学を専門にしようと考えていたので、TUGに参加させて頂きました。基本的には都市地理学に関する外国語の文献を分担して翻訳・解説していくというものでしたが、堺市の旧市街の巡検に出かけたり、高山や南紀や尾道などで合宿（と言っても半分は遊びでしたが）も行いました。この研究会は、私にとって自主的に研究を行った貴重な経験です。大場さんには研究会以外にも、卒業論文に関わってコンピュータ分析やデータ収集などいろいろな面でご指導頂きました。本当に感謝しております。

地理学教室で忘れられない行事が、毎年行われる春の一日巡検と教室旅行です。主に3回生が中心となって企画・運営・研究発表を行うのですが、私は2回生の時に参加した北海道への教室旅行が忘れられません。小向君が札幌出身ということもあって、現地解散の後、壁谷君の自動車で小向君の実家

におじゃまし、札幌市内を案内してもらいました。さらに壁谷君と一緒に晩秋の道東を旅しましたが、これも良い思い出です。我々が3回生になった時には、和歌山方面で一日巡検を行い、教室旅行は三河方面に向かいました。一日巡検では、下見の時に紀ノ川近くの露頭で小さな断層を発見したことが印象に残っています。教室旅行は鳥羽に現地集合し、フェリーで伊勢湾を横断して伊良湖岬から三河方面に向かうというコースを企画しました。三河国府、一色町、安城台地、豊田市、常滑市などを巡検・見学の後、名古屋で現地解散となりました。この時も解散後に小向君の親類を頼って穂積町に向かい、輪中集落や養老の滝を見学しました。全体的にハードスケジュールでしたが充実した教室旅行でした。

地理学教室の思い出はまだたくさんあります。しかもこうして筆を走らせていると「こんなこともあったな」と、忘れていたことが鮮明に思い出されます。卒業して15年以上が経ち、同期の者も卒業後の進路がバラバラで、教員になった壁谷君や中垣君以外はほとんど会うこともなくなりました。しかし、あの時全員が地理学教室の中で何かを求め、共有し、互いに刺激し合っていたことだけは事実です。我々が地理学の研究者のはしくれとして微かに光り輝いた時代があったことに誇りを持ち続けたいと思います。

(昭和59年卒業)